

〈書評〉

シバ・マリヤム・ジョージ著（伊藤るり監訳）

『女が先に移り住むとき——在米インド人看護師の
トランスナショナルな生活世界』

（有信堂 2011年 313頁 ISBN 978-4842065809 3,150円）

小ヶ谷 千穂



本書は、インドからアメリカへ渡った看護師が移住過程において直面した複数の水準におけるジェンダー規範との交渉を分析対象としている。タイトルが示すように、女性看護師たちが自らのスキルとネットワークを資源として先にアメリカへ移動し、その後夫や子どもたちが呼び寄せられるという、これまでの移民研究の中では注目されることの少なかった「専門職女性による先行移民」という国際移動が本書では取り扱われる。自身も渡米したインド人看護師の娘であるシバ・マリヤム・ジョージが、在米インド人コミュニティおよび送り出し社会であるインド・ケーララ州の双方でのトランスナショナルなフィールドワークをもとにまとめた、良質な研究書である。

ジョージ自身も本書の中で繰り返し指摘しているように、近年、「女性の国際移動がジェンダー関係にどのような変化をもたらすのか」という問いに基づく研究は英語圏を中心に蓄積を見ている。しかし著者が言うように、それはいずれも家事労働者を中心とする「単純労働」職につく女性を研究対象としてきた。それに対して本書は、「看護師」という専門職——そしてジェンダーと階級という点できわめて複雑な位相を持つ職業——として教育を受け、出身国内での職歴や資格を持った上でアメリカへと移動する女性移民を対象としている。この点で、既存の研究にはない「専門性とジェンダー」という分析の切り口が、「国際移動とジェンダー」という研究分野に付け加えられている。

こうした国際移動研究としての顔と同時に、本書はジェンダー関係のダイナミズムを実証的に解明する理論書としての特性も持ち合わせている。コンネルの「ジェンダー体制 (gender regime)」の概念を用いながら、本書では家庭、労働、コミュニティそれぞれにおけるジェンダー化された領域のありようと、その相互作用こそが先行移動する女性看護師移民をダイナミックに状況づけ、その中でジェンダー規範が常に「弾性」をもちながら日々構築され持続していることが明らかにされる。29名の在米インド人夫婦へのインタビュー、インド人集住都市である「セントラル・シティ」のインド・シリア正教会での「境界侵犯的エスノグラファー」(p. 13) としての参与観察、そして看護師とその家族たちの出身地であるケーララでの調査、といったマルチ・サイティッドな研究調査の成果である本書は、「グローバル化の時代における移民のジェンダー関係をとらえる際には、送り出しコミュニティとのトランスナショナルなつながりが移住後のジェンダー関係の展開にどう影響を与えるかをみる必要がある」(p. 33) という立場に貫かれている。この視点は、著者自身がしばしば直面したという、インドにおけるジェンダー規範に対する西欧中心的な視点への異議申し立てでもあるという。国際移動がジェンダー関係にもたらす影響の中でもとりわけ強調される「自律性」という概念ですら、ローカルな文脈の中で「連結的自律性 (connective autonomy)」(p. 54) という視点から理解されなければならない、とするジョージの立脚点は、地域研究的な視点からも本書を手ごたえのある作品にしている。

以下、本書の構成を紹介していこう。

序章では本書における調査方法、そして何よりも自身が在米ケーララ・コミュニティの1.5世代の女性である、というジョージのポジショナリティが、コミュニティや看護師世帯におけるジェンダー規範の調査、そして教会におけるジェンダー関係の緊張においてどのような意味を持ったかが論じられる。序章からすでに読者は、本書の調査自体がトランスナショナルで、かつ複雑なジェンダー規範の産物として生まれていることを理解できる。

第1章「女が先に移り住むときのジェンダー矛盾」では、国際移動論、そしてジェンダー研究としての本書の基本的なスタンスが、先行研究のレビューとともに示される。上述したように、コンネルの「ジェンダー体制」という枠組みを具体的に展開しながら、労働と家庭、労働と教会、そして家庭と教会それぞれの相互作用に本書が着目し、その中でも看護師たちの「労働」が、異なる領域間でジェンダー関係が相互に影響しあう上で重要であること、また移民看護師の事例においてはそれがトランスナショナルな文脈の中で考察されなければならないことが強調される。

第2章「労働——看護、女のネットワーク、そして『杭につながれた』男たち」は、まず送り出しコミュニティにおける「看護職」の意味についての分析から始まる。ケーララにおける「看護職」は「専門職」であるにもかかわらず、職業特性上見知らぬ異性との身体的接触が多いことから、汚れた仕事であり、しばしば性的な不道徳性とも結び付けられてきた。若い女性が賃金収入を持つ、という点でも看護師たちは「娘を働かせなければならない貧しい家庭」出身者、としての階級的スティグマをはられた。こうした女性たちが、独自のネットワークを通じて看護職への需要があるアメリカへと移民していく。そしてアメリカでのさまざまな出自を持つ他の看護師たちとの接触により、インド人女性看護師の職業意識は強まっていき、当然収入も上昇していく。しかし他方で、その夫たちの場合はむしろ逆に、妻に呼び寄せられて移動したアメリカで下降移動を経験する。「看護職」に対する独特の複合的なまなざし——性的純潔への疑いや、「自律しすぎている」ことへの冷ややかなまなざし、そして現実の稼働能力への評価——が、ケーララの文脈において丁寧に論じられている本章は、ここだけを取り出しても、「女性専門職」への社会的評価の分析として重要な視点を数多く提示している。国際移動によって女性たちが感じる職業面での「自律」や「エンパワーメント」の感覚、その夫たちの下降移動の経験・感覚の対比、そしてこうした「生きられた日常」の中でのジェンダー関係の変化が、「ジェンダーの理想」（伝統的なジェンダー規範）とずれることを、男女双方が埋め合わせようとする「ジェンダー戦略」のダイナミズムが、3章以降の本書の分析を特徴づけていく。

第3章「家庭——移民家族におけるジェンダーのやりなおし」では、看護師の夫（本書ではニュアンスを込めて「看護婦の亭主」という表現が用いられている）として、否応なくジェンダー関係の「現実的な」再編に直面せざるを得ない男性たちと看護師女性との世帯内分業が検討される。そこでは複数のジェンダー戦略（個人が自分自身のジェンダー・イデオロギーと生きられた現実とのあいだに折り合いをつけるために採用する行動計画）がとられる。本章では、渡米したインド人の世帯が「伝統的世帯」「強制参加型」「パートナーシップ型」「女性主導型」の4つに分けられ、特に「強制参加型」（他の選択肢がないために夫が育児や家事を担わなければならない=従来のイデオロギーの反転）、と「パートナーシップ型」（同様にジェンダー・イデオロギーの反転を経験するが、両者の間で民主的な分担が成立している）に女性看護師の世帯があてはまる、と論じられる。いずれもアメリカの労働市場における現実と、ケーララのジェンダー・イデオロギーとに齟齬が生じたことに対する反応である。「強制参加型」

世帯にあっても、たとえば経済的意思決定に関しては夫の顔を立てるなど、妻である看護師女性たちが巧みなジェンダー戦略を展開している様子が、丁寧なフィールドワークの結果として興味深く提示される。

第4章「コミュニティ——リトル・ケーララの創造と、教会で『遊びに興じる男』のパラドクス」は、こうした家庭内でのジェンダー分業において変化に直面せざるを得ない男性たちが、従来のジェンダー・イデオロギーを取り戻すための場として、教会コミュニティを活用している点が描かれる。同時に彼らは、同じ在米インド人コミュニティにおける上流階級の人々からは、「看護婦の亭主」——いわばケーララ社会の文脈では「逸脱」している、職業的に成功した女性たちの付属物——として、一種「去勢」された状態としてスティグマ化されてもいる。ここで、「労働」と「コミュニティ」におけるジェンダー関係は、相補的ではなく、むしろ相互に切り崩しあうような関係でもあることが明らかになる。

第5章「トランスナショナルなつながり—移民コミュニティの双面神的生産」では、これまで論じられてきた家庭、労働、教会それぞれにおけるジェンダー関係が、ケーララとのトランスナショナルなつながりの中で再生産されていることが明らかになる。それは、トランスナショナルなつながりが移民コミュニティの経済的、社会的再生産にとって貴重な資源である一方で、それが既存のジェンダーと階級に基づく権力関係をも再生産する一助となっている、ということも示している。ともすれば、移民コミュニティやトランスナショナリズムに対して、一種のロマンティシズムを見出しがちな移民研究において、ジェンダー視角を持ったジョージの研究は、こうしたトランスナショナルな紐帯が家父長制の再配置と表裏一体の関係にあることを鋭く指摘している。第6章で再び移民研究、ジェンダー研究、トランスナショナリズム研究それぞれに対して本書が持つインプリケーションが確認され、本書は閉じられる。

冒頭で述べたように、国際移動とジェンダーという研究分野において「専門職の女性先行移民」というカテゴリーに着目し、ローカルな文脈に照らした複数の水準におけるジェンダー関係の相互作用の分析を通して、ジェンダー規範の「弾性」——看護師としてのアメリカへの移民という、伝統社会の規範を多様な意味で突き破る変化をも飲みこみ、トランスナショナルな文脈をも利用して再生産をはかるようなジェンダー規範の弾力性と持続性——を明らかにした本書の貢献はきわめて大きいと考える。

ただ、2章や5章で言及はあるものの、全体的に分析の対象としたインド人看護師の移動が起こった時代的背景についての考察が、やや少ない印象も受ける。時代的背景と、看護師を取り巻くトランスナショナルなジェンダー交渉のプロセスとの具体的なつながりが明示的には描かれていない。また、個々の男女が複数の領域で展開するジェンダー戦略が、アメリカでの滞在期間の長期化、あるいは個々人の加齢といった要素によって変化しないのかどうか、という点についても、さらなる考察を期待したいところである。

しかしながら優れた質的研究であると同時に理論的な射程の広い本書が、監訳者らが述べるような「国際社会学」および「トランスナショナルなジェンダー研究」にとっての基本書の一つと呼ばれるようになることは間違いないだろう。

(おがや・ちほ／横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授)